

翻訳実務での機械翻訳の活用と成果を

翻訳者の40年の体験から紹介

① はじめに

新潟県の自宅で、東京の特許事務所や翻訳会社から原稿をメールで受信し、翻訳後に返信というテレワークで40数年働いてきた。

– 機械翻訳を翻訳実務で試訳し、結果を関係者に提示しセミナーで発表 –
機械翻訳の活用で82才でも翻訳で働き社会活動できることに感謝している。
社会活動として、防災マニュアルなどの地域資料を外国人支援用に翻訳。
町内を2分していた荒地を、有志と共に購入し寄付し市道と公園にした。
これらが、21年前に新潟県を襲った水害と中越地震の復旧作業に役立ち、
15年前に紺綬褒章を受章した。

② 最新の機械翻訳の優れているところ

2-1. 長文に追従可能：発表者が出会う翻訳原稿の文長の90%に追従可能
新聞記事は短文構成だが、この5倍程度の文長に追従可能

2-2. 辞書に非記載の新語：ベロプスカイト太陽電池, オミクロン株
(ポリ～～)のような長い化学用語でも、正訳を入手できる

2-3. 訳しづらい(紛らわしい)語句の適訳を入手できる：
(このロボットは人見知りをする)、(新製品は竜頭蛇尾で終わった)
上記はパソコンの辞書機能と機械翻訳を利用すれば、適訳を入手できる

③ プリエディット（原稿の事前確認）が重要

- 3-1. 原稿に誤字脱字などのミスがなくても、他の様々なミスが存在する場合があるので、慎重に原稿を調べる必要がある。例えば、
- 3-2. “**増幅器が増幅できる周波数帯**がこの分野で用いられる”を英訳する際に、下記のように補充して英訳しなければならない。

“**増幅器が○○を増幅できる周波数帯**がこの分野で用いられる”

増幅器は周波数帯そのものを増減できないからである。

正訳 **A frequency band in which an amplifier can amplify ○○ is used in this field.**

○○を補充して英訳したことをコメントして翻訳依頼者に納入する。

上記の原稿ミスを指摘し訂正して英訳し納入すると、翻訳依頼者の信頼度が高まり、優先的に翻訳の依頼がくる可能性が高まる。そのためには、翻訳分野の背景知識を高めるように努めねばならない。

④ ポストエディット（翻訳後の原稿との照合）が重要

私は、原稿を和文英訳する時に訳しづらかった文節や長文を確認するポストエディットとして、機械翻訳を用いている。

私の英訳文を機械翻訳を用いて逆方向に英文和訳し、その英文和訳文が原稿の日本文の意味と合致してれば、○として納入している。

私の英訳文に訳抜けがあると、機械翻訳が指摘するので非常に助かる。しかし、機械翻訳にも訳抜けや早合点の誤訳があるので慎重に照合する。

上述のように、機械翻訳の出力文に訳抜けや早合点の誤訳があるので、翻訳原稿と照合しながらの作業になる。ポストエディット単独の作業は有りえない。

私は、機械翻訳のプリエディットとポストエディットを、一文ごとに同時にいながら翻訳作業を進めている。

⑤ 機械翻訳に残っている課題（誤訳）

- 5-1. 訳抜け
- 5-2. 連語（複数の名詞や形容詞が連續）内の部分的な訳抜け
- 5-3. 早合点の誤訳
- 5-4. 数量表現の誤訳
- 5-5. 状態表現の誤訳
- 5-6. 能動態と受動態の区別が不明瞭
- 5-7. 翻訳原稿のミスに起因する誤訳
- 5-8. 日本の英語教育の盲点による誤訳（特に分詞構文の主語）
- 5-9. 主語の省略と補充
- 5-10. こんな英語じゃない（英語になつていればOK）
- 5-11. 多国語の翻訳と通訳

⑥ その他、ソースクライアントは情報漏洩の不安

上記の詳細は参考資料を参照、希望者にはメールで提供

吉川潔（きっかわ きよし） 翻訳業 2025年12月2日